

ミステリ読書案内

2022. 11. 7 発行元

第414号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回も読み慣れた作家たちの作品が多い。シリーズ物の流れの一冊ということ。安心して読めることが大切。不安ばかりがミステリではないな…。

新刊書店にて

新刊書店に入る。最初に行くのは単行本の平台。東野圭吾、中山七里、知念実希人…と並んでいるが、これらには手を出さない。ハードカバーを買えばその月の予算がなくなってしまふから。いずれ図書館に必ず入るので、後で読むかどうかはゆっくり検討すればよい。

続いてベストセラーではない単行本の棚。ここに要注意の本が隠れていたりするのだ。そして、ノベルスの棚へ。本当に何もないなあ。

文庫本の最新コーナー。ここでは何冊か買う。ほとんどがシリーズものだ。最後にライト系の棚に回る。ここにはミステリらしき雰囲気を持った本があるのだが、読むに値するかどうかは未知数。カバーに『〇〇探偵…』などとあっても、客寄せのファッションに過ぎないものもあるような気がする。無駄遣いにならないように細心の注意を払う。

9月10日、私が期待する新刊は少なかったような気がする。年間ランキングの締め切り直前になるので、調整もあるのだろうか。

今野敏「マル暴ディーヴァ」

9月に実業之日本社文庫から出た本。『マル暴甘糟』『マル暴総監』に続くシリーズ三作目。今野敏作品の中では最もくだけたサービス精神に溢れた内容になっている。「ディーヴァ」とは「歌姫」という意味らしい。実はこの「歌姫」、警察組織の中でも…という設定で、警視総監はじめ、『任侠シリーズ』の阿岐本組も脇役として登場してくる。弱気なマル暴担当の甘糟達男は今回も周りの刑事たちに振り回され続ける。麻薬売買の場が疑われるジャズクラブに下見に出掛け、素晴らしい歌声を聞くことに。ガサ入れは失敗に終わったが、甘糟とペアを組む郡原はクラブを買い取ろうとする半グレ組織に食い込んでいくことになる。

望月麻衣「わが家は祇園の拝み屋さんEX」

9月に角川文庫から出た本。シリーズが完結した後の番外編のような内容。完結編の5年後。学徳学園高等部に進学した一ノ瀬寿々の視点で描かれる。寿々は学園の部活動・拝み屋「ミステリー研究会」に憧れていて、新しい仲間たちと部の再スタートを計画する。寿々自身も霊能力を持ち、先輩の小春たちのような存在を目指したいと考える。そして、学園生活の中で先輩たちの5年後の姿を見聞きしていくことになる。賀茂澤人は大学部の専任講師となり『京都民俗学』の講座を担当。小春は大学を卒業して京都に戻ることに…。ある意味懐かしいメンバーがそれぞれの未来を切り開いている様子が伝わるホックリした展開。みんな順調である。

石持浅海「新しい世界で」

昨年12月に光文社から出た本。『座間味くんの推理シリーズ』の第5作にあたる。第2作以降は3人が語り合うアームチェアディテクティブの形式になっていて、日常の謎系の題材がほとんど。微妙な味わいの作品が多い。本作で警視庁幹部の大迫と会社員の座間味くんと会話を交わすのはハイジャック事件の時人質だった玉城聖子。第一話の『新しい世界で』はある家庭での離婚問題を取りあげたもの。表面に出ているのは単純に見えても、その裏にはある人物の仕掛けごとが隠されているかも…。座間味くんの別角度からの推理が楽しめるシリーズ。

松岡圭祐「新人作家・杉浦李奈の推論VI 見立て殺人は芥川」

8月に角川文庫から出た本。このシリーズも6冊めになった。ラノベ作家でまだ作家としては実績を上げられていない杉浦李奈は、文学関連の事件に巻き込まれ、謎解きを担当するようになる流れ。前作の『V信頼できない語り手』は小説協会の懇親会絡みの大きな事件だったが、今回はそれに比べると小振りだ。芥川龍之介の書いた『桃太郎』をテーマにした構成。都内で改造ガス銃による殺人事件が起きて、被害者の上に岩波文庫から切り取った『桃太郎』のページが置かれていた。芥川独特の解釈による『桃太郎』が「見立て殺人」とどのように結びつくのか。芥川が書いた『蜘蛛の糸』『猿蟹合戦』関連の話も出てくるし、ミステリで言う「見立て」関連の書籍がたくさん取り上げられる。いったい何冊の本の題名が取りざたされるのかと驚く。怪しい宗教集団まがいも登場してきて、後半はいつものながらの松岡圭祐らしい緊迫した展開になっていく。小説の解釈はそれなりに難しい。